



季誌
能古博物館だより

「子規、夜啼き山竹裂く。王母（鳥の名）ひるおりに靈旗翻がえる」
誌賛は杜甫作を広瀬旭荘書。絵は京都の画家「大原吞象」。

亀井学を大成した

大儒 亀井昭陽伝（十二） 庄野寿人

- ・ 死亡率が高かった（赤痢）下痢症
- ・ 昭陽妻の別府入湯一カ月の旅
- ・ 藩主も知る昭陽書の評判

文政八（一八二五）年、昭陽五十四歳・

正月明けの二月になって、十四日に長弟の太宰府「大杜（雲来と号す）」が死去。三日おいて長男の「義一郎（号は蓬洲）」が急逝。雲来死去に、昭陽は長男の義一郎に申意を表させ兼ねて葬儀にも出席するよう考えたのであるが、義一郎は急性下痢で臥しておると。

このため少栗婿の雷首と次男鉄次郎十九歳を太宰府に行かせている。

三日後の二月十七日、長男義一郎廿一歳が雲来叔父を追うように死去。

病症は、劇しい下痢をとまなう「赤痢」である。これは現代の急性伝染病として法指定され、発生の届出、患者の隔離など厳しい措置が規制されている。また医療的に抗性薬類の開発と消毒法の的確などで近来は珍しい病気とされるほど激減している。

以前は本症に感染するとすぐ劇しい下痢、これに「しぼり腹」といわれる腹痛を伴い、患者の多くは苦しん

で衰弱し、しかも高い死亡率を免れない。そのため、昔は多くの医者が症状を見てサジを投げるのである。

罹病の原因は、水道の発達しない時代の飲料水による感染、そのもとは病者汚物の水源流入、汚染による細菌の食物混入、または手指、或いは器物による経口感染など様々であった。これらは予防を徹底できない多様な原因であり、このため、將軍・大名など高貴な人物にも感染を免れなかったのである。

とくに細菌の蔓延によっては地域・集団生活、家庭など最も感染が甚だしかった。

次に四月三日、昭陽甥の山口駒太郎の江戸勤番中の急逝も、同じくこの赤痢症と思われる。

こうした昭陽最愛の身内が、年若くして死去した日記々事であるが、その記事は至って簡潔、わずかに結びに、雲来の場合「鳴乎毒哉」とする。毒字は訓読の一つに「うらむ」

写真：杉山 謙

と出るので「嗚呼うらむ哉」として天とわが身にすする憤りの言葉とされよう。

次の長男義一郎については、本人が生前居室にしていた「翠雲房」の東窓下に棺を安置、同室北窓下に家人と書生たちが棺を見守っている。これに阿紋(おもん)と阿八重(おやえ)が皆揃って通夜をする。両人は亀井家の女中であるが義一郎の生前に世話をしていたのである。

昭陽は、以上を五十七字の日記々事しているが、その結語に「形神恍惚何能記事」の八字を以てする。この訓みは(形神こうこつ、なんぞ記事を能くせん)とするのであらうが、昭陽も長男義一郎の死に、「すべてに虚脱、もうろうとして記事をよくするなどできもしない」と端的な言葉になったものと思う。

さすがの昭陽も実弟と長男を短時に失い呆然自失の状態である。長男義一郎は、昭陽の自らの不覚とされることで重傷骨折を生じ、このため長男として、いうならば武家の誇りである家督相続は、困難にしなければならなかった。

昭陽も随分と気を使い、義一郎の廃嫡、次男鉄次郎の家督届出をためらっていた。

義一郎は、幼少から学問に積極さを見せ、書も得意。六歳の大書は見る人みな驚嘆したのに本人は照れて丸めこんでしまったという。

七歳から剣道場に通い武士と儒者を兼ねる意気込みに満ちていたのである。

文化九(一八三)年、義一郎八歳。

亀井塾生の作詩会講に出席する。

同年蓬洲を号す(以下、本誌は此の号を使う)

同十三(一八三)年、蓬洲十二歳、父より新增築の居室「翠雲房」を貰う。

同十四(一八三)年八月十日、父昭陽に同伴し訪問先に於いて、蓬洲は脚部骨折の重傷を負う。十三歳であった。(亀井家譜に「八月十日驕虞折脚」と記録)

蓬洲は、足の治療が終わると(但不具が残る)塾舎に出勤、従前の勉学に就くが剣道は無理で自ら断念し、家学に励む。

文政七(一八二)年、父昭陽は次男鉄次郎十七歳に冠禮を行う(十月一日)

同八年(一八三)年二月十四日、昭陽直弟雲来(大壮)五十歳、太宰府自宅に没す。

同月十七日、長男蓬洲(義一郎)廿一歳没す。

雲来は蓬洲の生前に兄昭陽に、長

男蓬洲の家督が藩法によって許されない時は、わが家の養子に迎え、その後、昭陽の亀井家督を手続きをせよ、と勧めていた。

これに昭陽は、蓬洲を養子に出さない。弟陽洲に亀井家督相続をさせ、とも蓬洲は亀井家学の継承者とする、と内意を打明けて、雲来の勧告を謝した。

昭陽は、蓬洲の学力を陽洲との格差を両人の成長に従ってよく測っていたのである。

いま文庫に収蔵する両者の詩作、筆蹟を比べて、昭陽の意中がよく判断できる。しかし、蓬洲本人を失っては、すべてむなししい事実となる。

昭陽は、こうした身内の不幸に見舞われながら、文政十(一八二)年、父南冥の遺著「論語語由」の補訂をして完璧を期す大著「語由述志・十卷」の著述を果たした。同書は昭陽没後の大正十一年有名な論語企業家で知られる渋沢栄一氏によって美事な刊行書にされている。

いま一つ、ここで書きとめておきたいのは、昭陽の愛妻物語である。昭陽は妻「いち」に別府入湯一カ月を実行させたことである。

明けて文政十一(一八二)年四月十一日、妻いちのため女中まき、これ

に亀井家年来の世話やき隣地の染物屋女房(染婆と呼ぶ)、これに次男鉄次郎廿一歳、加えて妻の実家早船家当主の助次郎が下男善三を連れ、旅行中の一切を世話に当たるといふ。この一行六名を別府入湯の旅に出した。妻いちの女中と、平素のよき世話役さんの染婆、子息鉄次郎、これに妻の実家から助次郎(昭陽二女敬の婿)が下僕の善三を同伴して一行宰領役であるから、昭陽妻も安心の上なしの温泉行である。

これには、かねてから亀井びいきの博多大町人の松永子登がすべてに世話を届かせている。いちには一行の附け人として鉄次郎と早船助次郎が加わったことが何よりも心強い。

四月十一日、一行六名揃って朝早立ち、往路は日田經由、広瀬淡窓の行届いた世話を受ける。

母「いち」の別府入湯の亀井家留守には、娘少葉が紅染五歳を連れて来泊した。これには父昭陽がすっかり満悦で紅女に良い爺さん相手をつとめて飽かなかった。とくに幼い紅

が少葉仕込みの習字をするのは賛嘆してやまなかったのである。亀井家に、これが一点も残っていないのは、いよいよ今宿に引揚げるとき、少葉がすべて持ち帰ったのである。

昭陽は妻「いち」に別府入湯一カ月を実行させたことである。

昭陽妻の別府入湯には、藩規で女性の領外旅行は厳しい。よって昭陽は早くから藩許を得る手続きをして、四月二日許可を得ていた。これらで妻の旅立ちは多くに知られ、餞別金として総額十一兩二歩が寄せられた。その内容は旧門弟から在塾中の感謝をこめて贈られたものが多く、昭陽妻が各地からの入塾生にした様々な心づかいと苦勞が思いがけない報償となったのである。

戸送りの昭陽潤筆の慰勞として酒七升が届く。これは昭陽も格別のことであった。すぐに太宰府の雲来養子「少進」と今宿の少栗旦那「雷首」に「藩主からの頂戴物である」と、もったいをつけて御納戸頭からの酒二升宛を届ける。

昭陽は、妻を中心に一行の入湯旅費を宰領役の助次郎に「金七両」を前渡ししていたが、一行が丸一ヵ月後の五月十日全員無事に帰着した後、同十九日に助次郎は往復旅費と入湯諸費一切の内容を精算書とし、「出費四両一歩二朱、差引残高二兩二歩二朱の現金」と共に昭陽に差し出した。これには昭陽も少々驚いて「助次郎の配慮(本人の手出し)が過ぎるのではないか」くりかえし念を押したあげく、すべて了承した。

以下、参考に述べておく。
御納戸頭の役目は、藩主一族の生活経済一切を藩費で処理する。兼ねて藩主の私的意向すべて人事を含めて取計らう。現代の総理官房長官に相当すると見られる。そのため藩主が意中にするところは、御納戸頭によって取捌かれることになる。その際に一々を「これは藩主からの申しつけ……」などは言外とされていた。こうしたこともあって昭陽に酒七升は、これに類すると考えられる。このため昭陽のことは藩主の意中と解されるのである。

五月中旬、昭陽妻が別府入湯から帰着すると、その内祝にと、藩重役の久野外記から酒二升、また昭陽の組頭衣非氏から鯛三口に酒五升が到来、これには昭陽も恐縮、すぐに両太夫家に拝謝の参上をする。また衣非組頭の取次ぎで藩御納戸頭から江

さて、昭陽一家の詩文と書について僭越をかえりみず私見を述べさせていただきます。まず、長男の蓬洲であるが、廿一歳という若死のため詩文と遺墨類は少ない。文庫所蔵は計四点に過ぎないが、文も詩文も昭陽に迫る気魄が充分にうかがえる。十三歳で負傷し足が不自由になってからの作品であるが、少しも暗さを感じ

させず、すべてにのびのびしてよらしい。この人物が亀井家学を継いでおればと、惜しまれてならない。

次男陽洲は、兄の死後すぐに家督を父に言われるが、昭陽は陽洲に強く勉学と責任の自覚を求めたと思う。四年後、文政十二(八三)年十二月昭陽五十六歳の隠退と陽洲二十二歳家督に藩許を得る。

陽洲は、父隠退後すぐに城内出仕を始める。天保二年九月、博多町衆の恒例「松囃子」に上ノ橋から城内の約百米まで行列参入を認められた。これに藩家老一名を中心に数名の藩士が袷姿で仮座敷に上り、祝酒をふるまうのであるが、この中に陽洲も加わっていたことが記録に見える。

翌年八月、陽洲は城内「御書物番頭」に就く。又陽洲に絹衣着用、上ノ橋登城を命じられ、なお家老座の祐筆(秘書役)のことで、書きものは祐筆が書役に命じる)に任用される。廿四歳、父昭陽六十歳は隠居ながら健在、著述に精励する。

なお、藩士の城内出仕(登城のこと)は、とくに指名されない限り、下ノ橋が定めである。陽洲は祐筆役に就き、絹衣着用上ノ橋登城を命じられたのである。福岡城内の家老級屋敷は上ノ橋寄りにあり、城内の

政務座も近い。従って藩主とその奥向きの居住と出入りも上ノ橋である。また陽洲には御書物番頭の兼役も命じられた。この任務は政務にかかわりはないが、藩主からの「お下り書」もあり、時に藩主の書見に供する出納もある。

父昭陽の著述も進む。天保二年『尚書考』十二巻を完成、また『国語考』廿一卷。全八冊も仕上げ。以上は昭陽自筆稿ではないが、著述完成と同時に「百道社」名入りの罫紙に信頼される内書生に写本させたもので、すべて当文庫に所蔵する。

天保三年十月「礼記抄説」十四巻を完成。同書は使用罫紙各一枚を表裏紙に使用、これに昭陽自筆で本題と内容の項題を各冊に書す。

また、本書は、すぐ塾生講義に用いた。このため巻末の最終紙に天保壬辰十月六日卒業、蓋二月朔、緒に就く、と(原漢文)書込みがある。また各巻ごとに講義の進行を記すが、これは省略する。

南冥・昭陽父子の著述は、南冥の『論語語由』が秋月藩主によって公刊されたのを唯一として、体制派の朱子学派による妨害もあり、不幸にして刊行を得ず、わずかに写本として少数の伝世を見るだけであった。

前項に書いた蓬洲の書(掛軸2幅)を次に掲げ、訓読と解釈を加える。



(訓読)

牧豎は溪口を飲み 借な杜若の洲に眠る
春耕に苦景なく 水を隔だてて羊牛を繋ぐ

牧豎(ぼくじゅ) 牧童のこと。家畜の放牧を連れている少年をいう。

牧童たちは流れの水を飲んで皆「杜若」が群生する水辺に午睡している。春の農耕は気楽に明るい景色を呈しており、牧童たちは小さい流れを境に、羊や牛をつないで遊ばせている。

平和な農村で牛や羊を飼わされている少年たちの風景を活写した詩である。蓬洲の自作詩と書である。



壬午は文政五(一八二二)年、蓬洲十八歳である。

(訓読)「ろうきふくれき 志は千里に在り」壬午は文政五(一八三三)年老驥は年老いた馬。伏櫪は楽に余生を過ごすこと。

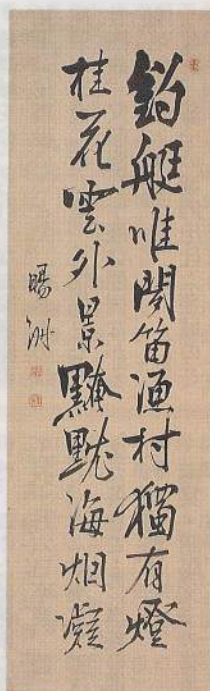
いま年老いた馬は馬小屋に長らくおとなしくしているが、駿馬が若く壮健であった時は千里を走る勢いを見せ、主人を満足させたことを忘れていないであろう。

蓬洲十八歳、自作詩書で本人を期待させる作品の一つである。

蓬洲は家学の古文辞とその詩調を早く自得し、博多町衆の長者とされた松

永子登に愛されて、若年ながら松永邸の詩作会指導に当たっており大いに将来を嘱望されていた。

賜洲の書三幅



釣艇唯閑笛漁村獨有燈
桂花雲外景 黠黠海烟凝

釣舟が見え、いづこからともなく笛の音が聞こえる。漁村に一つ灯りが見える。もくせいの花が遠くにたなびく。黒ずんでいるのは海の煙がかたまっているのか。



莊敬 〓 おごそかにす。 安肆 〓 安きをほしそのままにする。

おごそかにつつしむのは日々を強くする 安きをほしそのままにするのは日を偷む(無駄にする)ものである。



松柏の茂みはお互いを承ける。

孔子聖堂落成を祝う

安 陪 光 正

三瀬を越えて

能古博物館だより

能古の聖堂が完成したので、かねて尋ねたいと思っていた多久聖廟行きを思い立った。五月二十七日天気予報では午前中は高曇り、午後は雨と報じていたがやはり行くことにした。同行は運転の島君、妻と三人である。九時に家を出て三十分で内野、左に背振から金山への連山を車窓に初夏の三瀬峠へ向かった。左右に迫る若葉山は、頂近くまで黒々と伸びた杉谷、その間をうめる新緑の雑木山、頂に雨雲が垂れ、麓には黄ばんだ竹山が広がっていた。若葉山のあちこちに、ひときわ黄色に椎の花が目立つ。

第 25 号

そんな緑の山肌に白い水木の花が所々に咲く。初めは山法師かと思っただが、路傍に咲くのをみると散房花序の水木の花だった。枝を横に広げ、葉を覆って咲くから白い衣を広げたように見える。遠くの山々は紫一色だが、近づいてみると、若葉の緑にも濃淡があり、山ひだの陰影にも風情がある。山中の水木の花は、まさ

に「時に幽花ありて一樹明るし」の感があった。道は谷底の流れを曲折して登る。曲淵ダムは夜来の雨に満々と水をたたえ、岸辺に垂れた若葉と湖水にひたしていた。柿若葉の下の山家、樟若葉に覆われたお社、黄ばんだ竹山を風が波打って渡る。トンネルを出るとまだ朴や藤の花が咲き残り、それを車窓に古湯への道を下った。

五十年振りに通る古湯温泉は小雨の中、旅館鶴霊泉の裏庭に斎藤茂吉の歌碑を仰いだ。

うつせみの病やしなふ寂しさは
川上川のみなもとどころ 茂吉

苔むした緑陰の歌碑は、足下に川上川のせせらぎを聞き、川上に向かつて立っていた。車は天山の裏を廻り、天川から巖木へ出て多久へ入った。

楷若葉

三方山々をめぐらす若葉雨の駐車場で降りたが、あちこちに椎の花が咲いていた。傘をさして案内板に立

ち、見当をつけて石畳の道を歩く。左右から若葉が茂り、先を行く傘の数人につづいた。石畳を曲ると、正面の新樹の間に聖廟の屋根がのぞいていた。さらに進むと小さな仰高門が見え、ふと参道に流れくる椎の花の香に会った。傘をあげて見廻わすと、はたして右手の樹上に黄色の椎の花が咲いていた。「仰高」と刻った石門をくぐる。すぐ左手に心あての楷が若葉を茂らしていた。下から仰ぐと、萌黄色のはげに似た若葉が雨空に透けて見える。樹下の小石の間に、散った花茎がちらばっていた。



若葉雨の多久聖廟、正面の仰高門の左に楷樹青葉をみる

楷の木は、子貢が孔子の墓に植えたと伝えられ、ために孔木の名がある。中国原産のウルシ科の落葉喬木、トネリバハゼノキといひ雌雄異種、この木は雌株とある。交配の花粉は横浜の造園業「春之園」の雄株により、種を採って実生の苗を作る。能古に移植された楷の苗木はこれを親木とする。腰高のもの三本、背丈に伸びたもの一本、今若葉をつけている。

かつて西日本新聞は、多久の楷樹の由来について報じていた。

「初代林業試験場長白沢保美博士、大正四年中国山東省に出張の途次孔子の墓に謁し、その墓上に生ずる老樹の下に種子を拾収し、携え帰りてこれを播きえたる幼木にして、大正十四年三月寄贈せらる」

私が見事な楷紅葉を見たのは、昭和六十一年岡山の開谷学校（開谷）においてであった。本校は寛文六年（一六六六）備前岡山藩主池田光政によって、土農工商の別なく学ぶことのできる儒学道場として建てられた。三方に紅葉山を負う広い敷地に、唐様をまねたかまぼこ型の石垣をめぐらし、芝生の真中に大講堂が朱色

能古博物館だより

の豊を光らせていた。右手の山つきに孔子聖廟があり、そこへの石段の左右に、燃えるような楷の双樹が秋の陽をあびていた。この楷の木も大正十四年に植えられたもの、白沢博士の分苗によるもので多久との兄弟木らしい。

山東省曲阜の孔子生誕の地に彼を祀ったのは魯の哀公、その後次第に規模をひろげて今日の壮麗に及ぶ。子貢によって孔子の墳墓上に植えられた楷樹は、斯学のシンボルとなった。

孔子像

若葉雨そぼ降る楷樹の下から見上げる聖廟は、色あせた赤い門柱に赤い板壁、正面の小窓から奥に灯された孔子像が小さく見える。

多久は邑主多久茂文が元禄初年邑校東原厩舎(学校)を建て、同十二年(一六九九)中国から孔子及び四哲(顔子・曾子・子思子・孟子)の像を取り寄せて学校内に安置した。聖廟は元禄八年に起工、十四年の歳月を経て宝永五年(一七〇八)に落成した。設計に当たった佐賀の儒者武富成亮は、通称市郎左衛門、廉斎と号し、十六歳にして京都に出て中村惕斎の門に学んだ。

聖廟完成と共に、東原厩社の四哲

像は聖廟に移されたが、孔子像だけは新たに鑄ることとし、京都の中村惕斎が監督して二尺七寸のものが鑄あげられた。古い方の像は、聖廟完成後もそのまま学校内に留め置かれた。明治六年旧像は佐賀県江北町白木部落に移され、白木では祠を造って孔子神社といい、文廟神社、文廟社ともいつて今に祀っている。

閑谷学校の孔子像は、元禄十四年京都の儒者中村惕斎の監督で鑄造され、いぶし金質青銅の倚座像で等身に近い。惕斎は鑄造にあたり、その容貌などは孔子の徳を表現しうるよう自ら考案し、他の肖像などにはあまり頼らなかったといわれている。このことはやや長めの顔面、正しく通った鼻筋、超俗の目・口などにかがわれる。「治工洛陽涼風坊播磨大椽丹貞的、南効仲欽監」また「鑄工洛陽宣風坊今井光重、南効仲欽監」「元禄十四年四月十六日」の銘がある。このように多久や閑谷学校の孔子像は、共に中村惕斎監督の作品である。

聖像は語らず

さて能古聖堂の孔子像は如何なる来歴を持つものであるうか。像は高さ三四、一センチの倚座鑄銅像、作成は中国、時は明末清初期と推定さ

れている。孔子像の過半数にみられる特色として、孔子が駢齒だったの言い伝えから、太目の前歯二本が見えることがあげられている。この像もそれかと思わせる口元ではある。本像は鑄造以来四〇〇年、中国と日本を交転し、この前に跪拝した人々に教えを垂れたのである。しかし聖像は由来を語らず、また聞くに由なしである。

先日私は岳父の蔵書整理中、山室三良著『中国のこころ』を見出した。その見開きに、「浮雲世事改 孤月此心明、録東坡、三良、根城昼夜先生」と万年筆でかかれていた。この本のとがきによると、昭和四十三年先生の九大教授退官記念の著書であった。ここに書かれた東坡の詩は、彼が許されて謫地海南島から楊子江岸まで帰り、そこから江晦叔に与えた五言律詩の中の句である。「浮雲のごと世の中は改まり、孤月のごと此の心は明らかなり」、先生が来し方を省りみられ、退官の心境を託されたのかも知れない。

ここに山室先生の書物を紹介したのは、この本の中に「多久の聖廟」の一文があり、昭和二十五・二十七年の積業や孔子像の詳細が述べられていたからである。私が急に多久

を尋ねたいと思いつたのも、能古孔子聖堂の完成とこの一書に接したためであった。

南冥に始まる亀井学の研究と顯彰のため龜陽文庫を創始された真藤慎太郎、それを受け継がれた庄野先生によって、五月念願の孔子聖堂の完成をみた。また記念講座として、平成六年四月から大学の専門家による論語・老子・史記・伝習録などの中国哲学講座が開かれ、すでに二年目に入った。国家百年の計は人を養うにありと言われるが、先生の志千里にあることを想い、清風さわやかに胸中を吹きぬげる感がある。ここに龜陽文庫の益々の発展と先生の寿南山の如くあれと祈願する。

(註記)

- (1) 庄野寿人、孔子聖廟と銘木「楷の木」悠久二四七〇年を越えて、能古博物館だより、第一五号、一〇頁、平成五年本新聞、平成四年九月一日夕刊
- (2) 山室三良、多久の聖廟、中国のこころ一五八頁、創言社、福岡、一九六八
- (3) 林秀一、孔子像、学燈文庫「十八史略・史記・漢書」、口絵と説明、学燈社
- (4) 翠川文子、孔子をまつこと、能古博物館だより、第一四号、一頁、平成四年
- (5) 吉川幸次郎、宋詩概説、中国詩人選集二集一、一五三頁、岩波書店、東京
- (6) 一九八三

安東省菴と朱舜水

菰 口 治

(福岡教育大学教授)

江戸時代の初期に、高名な中国の学者と、当時はまだ無名であった日本人学者との間にうるわしい師弟関係が成立していた。江戸末期から昭和初期にかけての時期には、この話もかなりの人々の間で知られていたようであったが、今日ではそういうことも徐々に忘れ去られて、日本人学者の郷里ですらも、当然のことながら若い人々には遠い過去のこととなってしまっているようである。

りよだ館物古能

高名な中国の学者とは朱舜水であり、日本人学者は筑後柳川の人、安東省菴である。この二人のことについて、その人物やら二人の間のエピソードについて述べてみたい。まず安東省菴から始め、朱舜水に及ぶ。

元和八(一六三三)年一月二十八日、

柳川藩士安東親清の次男として、城下の宮永小路(現柳川市本町)に省菴は生まれた。安東家は代々大友家直属の被官であったが、主家の一族戸次道雪(立花城に拠ったため、のち立花と改名、宗茂の養父)の家老を務めていた。省菴の祖父連直の時

立花家の改易に遭遇し、加藤清正の家臣となったが、父親清の時代になって、柳川に復帰した立花家に戻り、五百石を給せられている。

省菴は幼名四郎、のち助四郎と改名、諱は親善、更に守正・守約、字は魯黙、号は恥察省菴という。宗茂・忠茂・鑑虎・鑑任の四代の藩主に仕えている。

省菴の少年期については詳しいことはわかっていない。六十六歳の時の作「除夜賦」において、「余、幼にしていまだ知あらず、徒らに射御を事として末技に耽る」と回想しているのによると、戦国時代の余音を引く時代に成長して、他の武士の子と同様に、弓矢の道に励んでいたものと思われる。

寛政十四(一七三三)年、省菴十六歳の時、故郷柳川の海をへだてた島原半島に、島原の乱が起った。彼は二代藩主忠茂の側近として江戸を出立、小瘡を患っているが、痛みを耐えて従軍し、少年ながらめざましい活躍をしている。乱平定後、再び江戸

に赴き、二十一歳まで滞在する。この間に学問に接する機会があったようである。「中秋ノ月」という作に、「昔、江戸にいたとき、経書の諸解を抄録した」とあるが、それはまだ本格的な学問への取り組みではなかったようである。

二十八歳までは柳川にいたが、この間の省菴の動向を知り得る資料はない。やがて京都に出て松永尺五に学ぶ。「除夜賦」によると、「三十歳近くになって初めて書物を読み、学ばなければ禽獣と同じであることを知り、発憤して京都に赴いた」と回想している。ここで初めて学問の目的は己れ自身の道徳的完成を旨とするものであることに気がついたのである。それからの勉強ぶりはさまざまいもので、勉学のためには客をも固辞し、貧しさも顧みず、病に見舞われんとしても、苦にするところではなかった。このころの省菴にとって、身体的な病苦よりも、精神的病苦を克服する方が先決問題であったと考えられる。

京都における五年間はこのようなして過ぎ、承応二(一六五三)年、三十二歳になって柳川に帰ってくる。そして初めて長崎に出かけている。この長崎行きは病気の治療のためであっ

た。どのような病気なのか、もとより詳しいことはわからないが、想像するに、京都時代の我が身を顧みないほどの学問への打ちこみが、長い時間の中で、知らず知らずのうちに、病魔の犯すところとなったものであろう。当時、長崎は国外に開かれた唯一の場所であった。ここには多数の中国人が折からの明末清初の困難を逃れて集まってきていた。そのなかにはいろいろな技術を持つ人々もいたと思われる。そういう噂を聞いての、名医を求めての長崎行きであったと考えられる。そしてはからずも、頼川入徳という医者にめぐり逢い、病気の治療だけでなく、後年の省菴の一生に大きな関わりを持つ人、朱舜水のこと聞かされるのである。

頼川入徳はもと中国の人である。陳明徳が中国名で、浙江省杭州出身の人であり、明王朝時代、二度、科挙の試験を受けたが、△格しなかった。そこで「士君子たるものは、末は大臣となるのでなければ、良医になりたいたいものだ。名を知らるるか否かは同じではないが、人を救うという点では同じだ」と考えて、医学を学んだ。慶安年間(一六六〇―一六六五)、海を渡って長崎にやって来て、大勢の人々の病を癒した。そうこうして

いるうちに、中国では南下してきた清が明を倒してしまったので、彼は国法に随って改姓し、潁川入徳となったのである。

入徳はもう一人の中国人を省菴に紹介している。同じく亡命の人、戴笠である。戴笠、字は曼公、杭州出身の人である。中国にあっては科挙の試験に合格した進士であったが、明王朝滅亡後は異民族の清朝に出仕せず、承応二(一六五三)年、長崎にやってきた。翌年、わが国に黄檗禅を伝えた隠元も来日する。戴笠は隠元について剃髪し、独立と称する。省菴は承応三年、入徳に独立を紹介され、このとき初めて朱舜水の名を独立より聞くのである。舜水はこの年の一月、五度目の来日のち安南に去ったばかりのことであった。

省菴と舜水の出会いは万治二(一六五九)年、省菴三十八歳、舜水六十歳の時のことであった。省菴が独立からその名を聞いてから五年の歳月が流れている。以後、二人のうるわしい師弟関係は舜水の死の年、元和二(一六八六)年まで、二十四年にわたって変わることなく続いていく。省菴をかくも引きつけた朱舜水とはいかなる人であったのか。

朱舜水は明の万曆二十八(一六〇〇)

年、浙江省余姚に生まれている。明の偉大なる学者王陽明と同郷である。もっとも陽明は舜水の生まれる七十二年前に没しているため、同時代人ではない。名は之瑜、字は魯璉、または楚璉ともいい、舜水はその号である。四十五歳の時、あの滅亡に遭い、以後故郷を捨てての流浪のなかで、望郷の思いを託してつけたものである。明滅亡の年、南京に拠つて王朝の存続を図ろうとする福王から再三にわたって出仕の要請を受けるが、固辞して受けない。さりとして異民族の清朝に仕える気は毛頭なく、舟山列島に逃れ、長崎にやって来る。その後十五年の間、舟山・長崎・安南を転々とし、万治二(一六五九)年、第七回目の来日の末、我が国に帰化した。この間の舜水に関することは、石原道博著『朱舜水』(吉川弘文館、人物叢書)に精しく述べられている。そして翌年、柳川から長崎に来ていた省菴と宿命的な出会いを持つ。省菴はこの時初めて舜水と逢うのだが、これ以前に手紙の往復はあったよう

で、舜水が帰化する前年、京都において潁川入徳を通じて舜水の手紙を受け取っている。当然先に省菴が手紙を出し、それに対する返事であつ

たはずである。省菴は舜水の帰化に際しても、さまざまな尽力をし、また帰化後の舜水の生活を、自分の俸禄の半ばを割いて援助している。このことについて、舜水は中国にいる孫の毓仁にあてた書簡の中で、次のように述べている。

日本は中国人の滞留をすでに四十年にわたって禁じている。先年、南京の船七艘が一緒に長崎に寄港した時、十回のうち九回までも、長崎の富商たちが連名して、その船が留まれるよう懇請したが、遂に許されなかった。こういうわけで私も長期滞在する気持ちはなかったが、安東省菴はたびたび要請し、方々にかけ合ってくれたお蔭でここに滞在している。これは私のためにだけに特例を開いてくれたのだ。私の滞在后、省菴は俸禄の半分を割いて、私の生活費にあててくれている。彼の俸禄は二百石だが、米になおすと八十石しかない。その半分というところ四十石である。その上、毎年二回、長崎にやって来て、私を見舞ってくれる。その一回の費用は銀五十両で、二回来れば百両になる。それだけで彼の残りの俸禄はなくなってしまう。それだけでなく、土地の産物、季節

のものなど次々と人に頼んで送ってくれる。したがって彼の生活は破れた衣服・粗末な食事で、たまにご馳走というと、一二匹の魚だけだ。家にはただ鍋はあるものの、煮炊きに用いたこともなく、塵が積もり錆びついている。彼の一族や友人たちはみな嘲り笑い、諦めたりもしているが、彼は平然として顧みず、ただ日夜、書物を読み、道を楽しんでいるだけだ。(原漢文)

省菴の舜水に対するこれほどまでの傾倒は何に由来するものであろうか。京都・松永塾における学問に飽き足らないものを感じ、真の道を追い求めていた省菴は、潁川入徳・独立を通じて聞いた舜水の学識・人格に、俗な言葉でいえば、一目惚れしたかのようである。

そのあたりの事情を天和二(一六六〇)年、舜水の訃報を聞き、身をよじらばかりの思いで書いた「朱先生を悼む文」によってみてみよう。

天和二年秋七月、今井嗣宗からの手紙によると、四月十七日、朱先生が逝去された。門生である私は憂い悲しみ、慟哭し、謹みて靈座を作り位牌を設け、涙をぬぐってお別れを告げた。思えば万治二

年、私が京都から柳川に帰るとき、

長崎の友人（頼川入徳）がやって来て、先生の鴻文二篇を渡してくれた。一つは交址の將軍・大臣に示された文章、もう一つは私に賜ったものだ。友人が言うには、

「この人は中国の大人で、高齡（この時舜水は五十九歳）の上、徳行も高い。姓は朱、字は魯璵といわれ、崇禎十七（六四）、明王朝滅亡のとき）年、二度もお召しあがったが、行かれなかった。ついで副使兼兵部郎中を授けられようとした折にも受けられなかった。行かず、受けられなかったのは、我が身だけを潔白にし、人倫を乱そうとされたからではない。国運が日々に劣勢になり、手の施しようがない状態になったためであった。君は学識をこの先生に受けることは、その榮譽は王公に知られるより、はるかに勝れるものだ」と。

私は感激して、即刻、礼状と拙い文章をお送りした。そのとき称呼の礼を失して無礼にならぬよう、お許しもなく弟子が師に奉ずる礼を用いました。翌年、中国から手紙を賜りましたが、千数百言に及ぶ丁寧なお言葉であったにもかかわらず、師となることは固

辞されました。

更にこの返事のなかには、明年の夏、貴国を訪れて、貴君と経書を携えて往復し、お互いに啓発したいものだとも書かれていた。省菴の喜びはいかばかりであったろうか。

再び舜水が来日したとき、省菴はすぐさま長崎にはいけなかった。折から藩主が江戸在府中であつたため、出国の許可を得られず、手紙を送つて来日を歓迎した。のち許可を得て長崎に赴き、念願の師弟の約を結ぶこととなる。

前に舜水は省菴の援助に対してどのような気持ちを持っていたかを見た。今度は省菴の方はどうだったのかをみてみよう。同じく「朱先生を悼む文」による。

先生が来日されたとき、そのまま日本に留まってもらいたいと思う者がいて、連名して長崎奉行に申し出たところ、許可がおりた。私は喜びのあまり夜も寝られず、帰郷するや、俸禄の半ばを分けて、先生の日常に給することにした。ところが先生は多きに過ぎると辞退された。私が申し上げますには、「昔の賢人は舟ごとの麦を贈つて友人の喪の助けと致しました。私は初めから師としてお仕えてお

ります。古人は師を君父と同列に置き、死をも厭わず仕えたといひます。死さえ厭わないのですから、それ以外のことは言うまでもありません。私の気持ちからすれば、全俸禄を差し上げて、私はその三分の一でも当然よろしいのです。だが先生の深いご配慮で、それではお受け下さらないことが心配だったので。そこで折中して半分としたまです。このことがもし道理に適っていなければ、差上げる者も、受ける者も人間ではないことになりす。先生の季節からすれば、窮死なされるとしても、不義の禄はお受けにならないでしよう。だがどうして私のささやかなまごころを不義の禄と思

われるのでしようか。私はさまざまなことにおいて他人に及ばぬところがありますが、ただ取与ということに関しては心の底から道理に適っていたと思ひます。それでもなお拒否されるのであれば、先生は人間ではございません。そんなことではどうしてお互いに理解しあうということになりましようか」と。ところが先生はそれでは自分の気持ちが納まらないと申されるので、更に私は申し上げ

た、「私が先生より豊かな暮らしをしていれば、どうして心が落ち着きましようか。万一、全財産を

はたいてお仕えるのであれば、気持ちだけはあつても、長続きするのは困難です。そこでよろしいように考えて半分にしたのです。

私に余裕があればこの限りではありませんし、ご不足の場合も半分ずつとは致しません。どうか過分なご遠慮はおやめ下さい。私が先生を尊敬するのは名譽をねらつてのことではありませんし、先生もまた私に眼をかけて下さいますのは個人的なものではございませんでしよう。ただ聖人の学問が明らかになることを願っているだけです」と。

省菴からしてみれば、舜水と師弟の關係になつた以上、師の窮状を見過ごすことは、君に対する不忠、父に対する不孝と同等の重みを持つと考えていたのである。俸禄の半分ではなお申しわけない。もっと多くのことをしてあげたい気持ちで一杯だったのである。しかし多すぎるとは舜水の辞退するのが眼に見えているので、やむなく半分で妥協しているのである。自分の赤貧は顧みるところではない。ただひたすら舜水から聖人の

道を学び取り、それをこの国で一層明らかにしたいという希求がとらしまれた行動であったと考えられる。省菴のこの援助は寛文五(一六六五)年に、舜水が徳川光圀の懇意に抗しきれず、江戸に赴くまで続くのである。

この間、寛文三年には長崎で大火があり、ほとんどが焦土となった。舜水はわずかに身を逃れて、皓台寺の軒場に雨風の蔽いもなく奇遇しており、町には盗賊が横行し、食糧事情の悪さは旦夕の命に迫っていた。

暑中の読みものに・どうぞ

中国哲学・菰口先生講座『史記』刺客列伝第二十六

「豫讓」の訓讀抄録

日本版山本周五郎作『よじょう』抄録を併せて掲載

第2期・中哲講座『史記』刺客列

伝講義「豫讓」に及んだ。同記事は現代作家「山本周五郎」が宮本武蔵の物語りに利用、その題名も「よじょう」として作品にされている。関心のある方は同作品(新潮文庫)をお読みになっては、と講師菰口治先生の七月二十九日講義に付言された。

ついでに、史記の『豫讓』と山本周五郎作品「よじょう」を、次に抄

省菴は舜水を餓死させては世間に顔むけができない、死ぬも生きるも舜水とともにあるとして、即刻駆けつけ、仮寓を建て、焼け残った書物や日用品を収め、無事を喜び、数日間歓談して柳川に帰っている。

寛文五年の舜水の江戸行き以後、省菴は二度と師と会うことはできなかった。しかし、二人の手紙の往復はなお続く。これまでの長崎と柳川とのように頻繁に交わすことは無理ではあったが。

録で披露して参考に供する。

『史記』刺客列伝第二十六

豫讓(よじょう)は晋の人、以前に范という国に仕え、また中行氏に従った。しかし、どちらも重用されることもなかった。そこで、智伯という邑主に就いた。

智伯は、すぐさま彼の人柄を見込んで信頼してくれた。その後、趙の襄子という国主と争いを生じたが、

敵は韓、魏の二国と謀計し、遂に智伯は討たれた。また智伯の家族縁者も独り残さず殺し、その領地も敵に三分され寸土も残らなかった。加えて趙襄子は智伯を深く恨んでおり、智伯の頭骨に漆を塗り、これを酒器とした。

豫讓は山中に逃れていたが、故主の智伯に対する非情な仕打ちを知り「嗚呼。士は己れを知る者のために死すという。我れ、まさに智伯の仇を討ち、これに死を以て報いん」と。

そのため己れの名を変え、囚人の仲間に入る。折もよく、趙襄子の館の便所大改修について、刑囚人による壁塗り工などが使役される話を聞き、豫讓は変名して巧く刑人の仲間に入った。胸中に匕首をしのばせた。仇の襄子も警戒心が強く、刑人の群にも厳しい調べをさせた。これに豫讓の匕首が発見されたので豫讓は「故主智伯の仇を報ずるため」と語った。そのため側近らは直ちに豫讓を誅さんとした。これに襄子は「彼れ義人なり。吾は今後とも警戒するなり。すにやかに放ち去らしめよ」と命じた。

豫讓は、一たび失敗したが、なお目的を捨てず、時をおいて考えるに既に自分の容貌を知られているので

容易に仇に近づき難いと考えた。このため顔面はもとより身体に漆を塗り癩病患者のようにし、また炭を呑んで声を変えて、唾の如くした。これで市中に出て物乞いをするが、妻もわが夫と気付かなかった。さらに街を歩いたが、さすがに友の一人は、

豫讓に注意深くしており、豫讓ではないかと聞き、豫讓が答えるに及んで、友人は泣いて云った。君の才を以て進んで趙襄子の臣下たらんとすれば必ず君を許して側臣とするであらう。その上で襄子の油断をうかがい其の怨みを晴らすべし、と。

これに豫讓は、仇に臣従した後には機会を見て復仇するは、二心を抱いて仕えるもので最も卑劣である。すでに己が為す方法は困難も多大なりと思うが真当なれば変えず、と友人に謝して別れた。

以後、襄子の外出をうかがうと、必ず道中に橋があるを知った。よって橋下に伏して時機をうかがった。

やがて襄子は行列を以て此の橋を渡りかけたところ、列中の馬が何物かに驚いたようで跳ねた。襄子は豫讓あり、と感づき従者に探索を命じて云うに「汝が旧主のため我を仇として成らず、これを我が許したこ

とも、まさに世間知るところ。いま又我を討たんとするも成らず、今回は汝を許すこと能わず、汝も覚悟すべきなり。豫讓云うに、君はすでに寛大の処置を以て我を許されしこと天下の人々これを称ぜざるなし。今日の始末に於ては、臣もとより死す覚悟あり。さりながら、願わくば君の衣を申受けて之を撃ち、聊か思いを遂げし、何卒御承引願いたしと言う。これに裏子は汝の義心に感じたりと召使いの者に衣を持たせ豫讓に与えた。豫讓は、劍を抜き三度躍り上がって之を打ち、我れ地下に於いて旧主智伯に報告すべし、と。遂にわが劍の上に身を伏せ自殺した。諸国の志士、これを伝えて、皆彼の為に落涙せりと伝う。

山本周五郎作『よじょう』抄録

肥後国熊本城の大廊下で、宵の暗くなりかけた長廊下を宮本武蔵がさがってくるところを、待伏せた何者が襲った。これに武蔵は声も上げず、ただ一刀でこれを斬り倒した。

何の仔細もなく、それだけである。

仕掛けたのは藩料理人で鈴木長太夫という。代々料理人ながら帯刀御免の武士身分で、意識は武士気質が多分であった。或る時、同僚と宮本

武蔵の技倆について論議し、いかに宮本どのでも不意打ちは避けられない。いや避けられるという者が多かった。それで長太夫がためしに出た。これで宮本殿の眞の技倆がわかればたとえわが身は斬られても満足にする。後に長太夫の長男の数馬が云うに「父上は粗忽ことをなさったようであるが、さすが劍の精神は知っておられた。父上は斬られなさったとき駆けつけた人に、「自分はこれで満足だ。」と言われている。従って家族は宮本武蔵殿にいささかの意趣も持つものでない」と云った。

これに次男の岩太は「ほんとうに御満足だったのかい。たかが劍術のことで斬られて口惜しくもねえ、満足と云って死ぬなど、兄貴もお人好し過ぎるよ。」

「もう立て、岩太、きさまの下司根性は父上を汚す。お別れを申し上げて帰れ。貴様を呼んだのはお父上の御遺骨の前で勘当を申し渡すためだ。鈴木家も俺たちも一切今後は絶交である。」

これは、岩太が日頃からぐれて早くから家の出入りもせず、やくざと云われる仲間に入り、父も生前から考えており、本人の帰宅を待たないことであつた。

岩太は立って父の遺骸に向かつて、「おやじ、気の毒だがこんどはおめえも、俺の邪魔することはできねえぜ。兄貴もよ。縁切れて他人だぜ。へ、あばよ」と立ち去った。

熊本の下町を東に出はざれると水前寺へ白川を渡る橋があつた。水前寺には成趣園という藩主の別邸があり、この道筋は重臣たちの控え家もある。従って往来も少なくない。橋を渡って十間ばかりいった右側の道から三尺ほど低い草地に、粗末な蒲鉾小屋のようなものができ、乞食らしい者が住み着いたようである。市内見廻りの下役人が見つけて、この道筋は藩侯も通られ、重臣たちの往来も多く、平素から清潔を心掛けている。乞食の居住など、もつてのほかである。見廻りの下役人は怒った。下役人は道をとび下りて、小屋の前を六尺棒で地面を叩いた。

「これ、出てまいれ」下役人は、どなった。「かような場所に勝手な物を作って、不届き千萬である。」

岩太は無精髭も月代も伸び放し、顔も手足も垢づいてゐる。衣類もよれよれで汚く臭い。

「おまえはどこから来た乞食だ」

「私はこの土地の者です。父は死にました。料理役の鈴木長太夫。私

は二男の岩太という者です。」

下役人は眼をみはった。「鈴木長太夫：鈴木殿の二男：」下役人は眼をみはって驚いた顔付で、やや暫く岩太の顔を見据えた。

「見覚えがある。鈴木殿の御二男だ、それから急に神妙な顔になり自分でうなずいた。

「いかさま、さようであつたか」下役人は、しきりに感動したようである。「あの方は、この先に控え家を持っておられる。なるほど：」岩太は分けがわからず、ふてくされた顔つきで、黙っていた。

「いや、御無礼をつかまつた」

「さようなわけなら致方ありません。私としても上役に申しひらきができます。そうとなれば堂々たるものです。ひとつどうか……今回はまことに御無礼。下役人は岩太におじぎして六尺棒を持ち直して去った。

「なんでえ、どうしたってんだ、いったいどうしてんだ」

見ていると、下役人は橋のところまで、こちらにおじぎをしている。岩太もつられおじぎをしたが、なんのことも全然わからず、癪にさわって、ベッと唾を吐いた。

結局、下役人の最初の口ぶりから此処が水前寺道だということは気付

能古博物館だより

いた。最初は追っ払らう口ぶりであつたが途中からおかしなことも云った。そういうわけなら構わないとか、堂々たるものだから、そしてあやまるようにおじぎまでした。

「どういふつもりなんだ。わけがわからねえよ」

わけのわからないことが続いて起つた。翌日の朝、淀屋という旅館の隠居が下男に重詰を持たせてやって来た。「やっぱりそうでしたかい」としきりに感心した上で、重詰を置き隠居はふところから紙包を岩太に渡し「それでしたかい」と何度も繰り返し「どうも帰っていった」。

紙包には小粒で一両あった。重詰は御馳走づくめだ。二日は食える。また人が来た。昨日の下役人が案内している。服装の立派なものと、威厳もあり高級役人とわかる。

「昨日は御無礼を仕った。御支配役木下主膳殿でござる」次いで主膳は云った。「私が責任を負います。見廻り組支配が承知である。そう云つて下さって結構。どうか心おきなくこの上は存分にひとつ、どうか」そして、これは拙者の寸志でござると、小さな紙包を渡して帰った。紙包の中には一分あった。岩太は最初は追いつて立られると観念していたが「責

任は引受ける」と。「存分にひとつ、どうか」これは何を言つたか岩太にはさっぱりわからず、ただ言葉の一つと気にもとめず、この場所はどうか勝手にしなさい、とも思える。

岩太は考えた。借金と不義理だから、家人はもとより誰も相手にされず世間の鼻つまみであった。兄も数馬には乞食にも劣ると云われた。それが急変した。岩太はどうして変わったか、まさか乞食になつたからか、現実にはそうとしか思えない。乞食になるのは、きりつとした勇氣のあることかもしれないとも考えた。

橋本屋という旅館の主人が来た。これも重詰めと金二分、それに敷物にと毛氈一枚をくれた。そして声をひそめながら「どうかしつかりおやんなすて、どうかしつかり」と。岩太に何も云わせず「すべてわかつております」と。岩太は、かえって黙っているほうが良いようであった。みんな独りのみこんで帰って行く。

日の経過と共に、次から次に訪問客が多くなり、知らない者が多い。侍は、みんな丁寧に挨拶し、金と物と、なにかしら置いて行く。「こう貰い物が多くちゃ、小屋の拡張をしなくちゃならねえ」岩太は身の回りを眺めて云つた。

電陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市)・天谷千香子⑤・西嶋洋子⑤ 岡部六弥太⑤・村上靖朝⑤・星野万里子⑤ 吉村雪江⑤・速水忠兵衛⑤・桑形シズエ⑤ 田上紀子⑤・安藤勇一⑤・宮徹男⑤ 上田良一⑤・西村忠行⑤・高田浩二⑤ 桑野次男⑤・玉置貞正⑤・木戸龍一⑤ 西島道子⑤・重則⑤・石橋七郎⑤ 藤木充子⑤・和田宏子⑤・西川真澄⑤ 末松山太郎⑤・板木継生⑤・中畑孝信⑤ 鬼塚義弘⑤・吉原湖水⑤・行成孝信⑤ 片岡洋一⑤・石川文之⑤・橋本敏夫⑤ 宮崎集⑤・岡本金蔵⑤・都筑久馬⑤ 若下須美子⑤・斎藤三⑤・石橋観一⑤ 青柳繁樹⑤・吉村陽子⑤・西野政憲⑤ 林十九楼⑤・安永友儀⑤・磯崎啓子⑤ 織田喜代治⑤・坂田泰滋④・山内重太郎④ 若重二郎④・横山智一④・桃崎悦子④ 大神敏子④・土屋正直④・上田博④ 鶴田スミ子④・伊藤康彦④・石橋清助④ 塚本美和子④・三角健市④・寺岡秀實④ 柳山美多恵③・奥田稔③・原丸種美③ 岸洋子③・井八重枝③・平河清次③ 長尾茂徳③・村上敏枝③・墨田耕典③ 葉山政志③・久方正隆③・吉富とき代③ 大山宇一③・川島貞雄③・半田耕典③ 西尾健治②・黒川松陽②・野和子② 藤山雅敏②・久野敦道②・森本憲治② 木原光男②・吉田洋一②・神戸純子② 渡辺美津子②・荒谷幸子②・前田静子② 藤野幸子②・野口重芳②・星野治郎② 原口虎夫②・福田満須美②・鶴田俊隆 丸尾好幸②・森巻重義②・高千寿丸 富永紗智子②・森志由②・高千代子 糸山好太郎②・山口由利子②・首藤卓哉 山田博子②・佐藤謙弘②・飯岡克晃 浜崎正也②・佐野清春②・吉岡克晃 小川信吾②・永岡喜代太①③・岩谷正子 熊谷伸吾②・由比直樟⑤・(大野城市) 伊藤原輔⑤・田代章⑤・(執行敏彦③) 山田幸子②・久野敦子②・渡辺千代子 坂井幸子②・春日市・後藤和子⑤ 白水都・足達輔治・(筑紫野市)

- 横溝清⑤・脇山浦一郎⑤・川浪由紀子⑤ 原富子③・川田啓治・(太宰府市) 中村ひろえ⑤・佐々木謙⑤・古賀謙二⑤ 平岡浩④・西尾弘子④・末松祐而 蔵田はつとよ⑤・野尻暎子・(筑紫郡) 葛城信⑤・(柏屋郡)・榎田正己⑤ 榎田猷子⑤・神崎憲五郎⑤・青木良之助⑤ 友野隆④・松本雄一郎④・井手俊寿⑤ 鈴木恵津子③・長崎榮三③・井手加津子③ 川原敏子③・(宗像市)・益尾天嶽⑤ 木村秀明③・(甘木市)・佐野至⑤ 井上カヨ⑤・黒川邦彦⑤・井手太⑤ 山崎エツ子③・(朝倉郡)・鬼丸雪山⑤ 田中トクエ③・(瀬塚市)・小山元治⑤ (浮羽郡)・古瀬宗雄⑤・(大牟田市) 嶽村魁⑤・古賀義朗⑤・古賀邦靖② 西山正昭・(筑後市)・中島栄三郎③ (菊田町)・木下勤⑤・(北九州市) 片桐三郎④・平野巖⑤・市丸喜一郎 (久留米市)・庄野陽一⑤・(柳川市) 榊島政信・(直方市)・山本利行⑤ 鋤田祥子・(佐賀県)・甲本達也⑤ (大分県)・寺川泰郎⑤・田本政宏③ (長崎県)・浦上健③・(熊本県) 濱北哲郎⑤・(山口県)・大塚博久⑤ 松井日出雄⑤・(大阪府)・小山富夫⑤ 前田敏也④・松村浩二⑤・(滋賀県) 庄野雅史③・(愛知県)・杉浦五郎⑤ 林野健次⑤・(神奈川県)・中野晶子⑤ 山根ちす子⑤・(東京郡)・片桐淳二④ 大島節子⑤・(千葉県)・森中加代⑤ (埼玉県)・間所ひさ③④・(石川県) 丸橋秀雄④・(宮城県)・田中信彦⑤

【協賛会会員(個人)】

- 片桐寛子(福岡)⑤・中村登(福岡)⑤ 大里豊男(福岡)④・広瀬忠(福岡)⑤ 笠井直登(福岡)⑤・早船正夫(福岡)⑤ 菅井徳三(福岡)⑤・野口一雄(福岡)④ 荒木靖邦(福岡)⑤・梅田光治(福岡)④ 浄満寺(福岡)⑤・永田蘇水(福岡)⑤ 奥村宏直(福岡)⑤・安熊光正(福岡)④ 沖双葉(福岡)④・七熊澄子(福岡)④ 熊谷雅子(福岡)②・上田満(福岡)④ 亀井准輔(福岡)③・富安渡(福岡)④ 小田一郎(福岡)①・滝栄三郎(福岡)②

五日目の夕方、貰った金が七両三分二朱あった。こんな金を持ったのは生まれて初めてであった。

「乞食を三日するとやめられねえというのはこのことだな」と、岩太は溜息をつきながら合点した。「なるほど昔の人の言うことに嘘はねえ。こいつはやめられねえや」

宮本武蔵の行動は、登城道であるので、朝夕二度は必ず岩太の乞食小屋を通る。これは岩太が水前寺道に掘立小屋を己れの寝ぐらにして数ヵ月後に知った。毎日のことだから、小屋の中からうかがうと供は七人前後、武蔵自身は姿勢もよく脇差だけを腰に前を歩く。すこしの身構えもなく自然体で悠然と、細身の身体で普通の者と変りはない。

岩太は、武蔵を仇などと夢にも思わず、偶然、身の行くところ住まいもない境遇から蒲鉾小屋の寝ぐらを作っただけで、相変らず市中の悪党地廻りをしようと考えていた。それが、どうした風の吹きまわしか思わぬ体験に見舞われているところである。昔に遊んだ水商売の女たちも、ここ数年は岩太のぐうたらさに突き放すような態度であった。この女たちまでが岩太に手土産を持って見舞うようになっていた。そのうちの一人

人が、岩太に「立派にやれるわね。大丈夫だわね」「相手だつて鬼でも魔でもないわよ。立派に仇が討てるわね。岩さん」

この言葉には、岩太が驚いた。「仇を討つたあ、なんのこった」

岩太には事の次第が初めてわかってきた。多くの訪問者は口に出さない者、遠まわしに言った者。みんな岩太が仇を討つ。それも天敵の宮本武蔵に父の仇を討つ。岩太の乞食は仇討ちの策略である。そう信じて岩太を激励したのである。

細川侯の賓師とされる宮本武蔵、藩士も城下の人間も、この人を仇になど軽々と言えるものではない。

無敵と評される武蔵に、親の仇として乞食に身をやつしている岩太の心根に無言の声援を送ってくれたのが、岩太の日々見舞いである。

世間は、悲壮な岩太に同情と尊敬を持った。宮本武蔵に崇敬者は多い。しかも藩侯の賓師であるにもかかわらず岩太は父の仇討ちをする。

逃げる相手ではなし、しっかりと落着いておやりなさい。これが世間の期待である。見舞い客は、ひそかに訪れ言葉少なに食糧、金銭を置いて、それで長居はしない。

ようやく、岩太にもすべてが読め

- 南 誠次郎(春日) ⑤・木原 敬吉(飯塚) ⑤
 具嶋 菊乃(甘木) ③・大久保津智夫(嘉穂) ⑤
 庄野 直彦(直方) ④・原田 國雄(宗像) ⑤
 森光英子(久留米) ②・西喜代松(北九州市) ⑤
 永井 功(北九州) ②・花田加代子(遠賀) ③
 本村 康雄(三池) ①・中山 重夫(唐津) ④
 緒方 益男(佐賀) ⑤・七熊太郎(佐世保) ④
 七熊 正(佐世保) ⑤・浦上 健(長崎) ②
 田中 貞輝(愛媛) ①・小堀 定泰(滋賀) ③
 伊藤 茂(神戸) ③・西村 俊隆(東京) ④
 白水 義晴(東京) ⑤・早船 洋美(東京) ④
 翠川 文子(埼玉) ①・石野賢恵子(東京) ④
 多々羅幸男(千葉) ④・江崎正直(東京) ①
- 会員ご氏名に⑤は、会費ご継続五年目をいただいたしるしです。
 () は多年分のまとめお払い込み、() は増口数ご負担を示します。

【法人協賛会員および特別協力法人】

- 九州 電力 ㈱・大野 茂(福岡)
 ㈱ 新出 光・山本 豊(福岡)
 出光興産福岡支店・山本繁弘(福岡)
 ㈱ 福岡中央銀行・山本敬一郎(福岡)
 医業 ㈱ 南川 整形外科 病院・南川勝三(福岡)
 日本製粉㈱福岡工場・白尾嘉弘(福岡)
 福岡県警備業協会・村上五一(福岡)
 流通 共済 ㈱・花田積夫(福岡)
 タイム社印刷 ㈱・安部博満(福岡)
 ㈱ 立 組・立 忠夫(福岡)
 博多ちくわ・㈱ 魚嘉・松尾嘉助(福岡)
 権藤税理事務所・権藤成文(福岡)
 協通 運送 ㈱・富安 渡(福岡)
 大牟田 運送 ㈱・本村康雄(福岡)
 ㈱ 三島設計事務所・三島庄一(福岡)
 日 西 物 流 ㈱・原 重則(福岡)
 西 日 本 急 送 ㈱・原 重則(福岡)
 愛宕建設工業 ㈱・野村六郎(福岡)
 東洋特殊機工 ㈱・西尾敏明(福岡)
 西尾トラック運送 ㈱・西尾秀明(福岡)
 南愛光ビルサービス ㈱・野田和禎(福岡)
 南クリーン 開発 ㈱・野田和禎(福岡)
 延 寿 産 業 ㈱・池田邦夫(福岡)
 九州三菱ふそう自販 ㈱・宮崎慶一(福岡)

能古博物館の会

協賛会(個人) 年間1万円
 (法人) 年間3万円
 館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける
 納入方法 郵便振替 0173019160970
 財団法人 能古博物館
 右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。
 ※新規の御加入(先号以後、平成七年七月三十一日現在)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。
 友の会 年間3千円
 (館)の活動、館誌購読と催事企画に参加
 自然と文化の小天地創造

【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。

『関秀 亀井少梨伝』

詩、書、画の作品で仙厓の次に多いのが同時代の亀井少梨。しかも少梨には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。
 B5版・表紙布装美本
 限定 二、〇〇〇部
 図録全カラー50頁・本文94頁
 直売頒価 三、〇〇〇円
 (送料 三二〇円)

図書出版

た。岩太は笑い出した。「みな底抜けだ」。岩太は貰い物も金に換えて資金を溜め出した。面白いように殖える。こうして月日が経過した。

最近、岩太が気にするのは、朝夕二度の宮本武蔵が登下城する姿が見えないことである。いま一つ、岩太が最近に気付いたことは、武蔵が下城の時に限って岩太の小屋から上の道をさしかかると、歩みを止め前方を見据えたままで暫く立止まること。

姿勢は真つすぐ、歩行の時は両手の軽い握り手の指先を伸ばして全身の力を全く抜いた格好である。供の者は主人との間隔(7〜8メートル)

をそのままに、数呼吸おいて主人と従者は以前の通り歩き出す。岩太のことを耳にしての行動でも全くなく偶然日々くりかえされることである。登城の時になく下城に見られる。この時、岩太は小屋の中で、じっと見据えることにしている。

岩太の金子は溜り、百両を越える。時々、旅館の一つでも買取して以前の女性と宿屋でもするかと考えていた。

突然、朝早く岩太の小屋前に立つた人物がある。

「鈴木氏、鈴木氏に御意を得たい」岩太はとび起きた。「唯今出ます」

と応答した。急いで帯を締め直した、奇妙に體がふるえた。こんな早朝に小屋に来て、公然と呼び起こされるなど、かっけない。髪を撫でつけ、えりを正して外に出た。

外には袴を着けた侍が立ち、うしろに下僕が狭箱を置いて控えていた。「鈴木氏ですな」と侍は言った。「私は宮本家の者で太田藏人と申します」。「わたくし鈴木岩太です」

「御承知でもあらうが、主人病気のため昨夜ついに死去しました」岩太は口をあいた。何もいえない。「ついては、主人からさきもとへ贈り物があります」

侍は振り返って、狭箱から一枚の帷子かたびらを取り出した。水浅黄に染めた生麻の帷子であった。それはいつもあの人が着ていた、裾の長い帷子であった。

「主人が臨終に申しますには、この二天を父の仇とつけ覗う心底あっぱれであった。討てるものなら討たれてやるつもりであったが、その折りもなく自分は病死する。さぞ、そこもとは無念であらう。今やいかんともなし難い。身につけた着物を遣わすゆえ、晋の豫讓の故事にならって恨みをはらすよう、とのことでございました」岩太は「はあ、それ

は…」と、もじもじした。

「そこで御得心もまいるまいが、主中の胸中お察しの上、お受け取り下さるまいか」

「はあ、それではもちろん、もちろん」

岩太は帷子を受取った。わけはわからないが、受取っておじぎをした。侍は鄭重におじぎをして供をつれて立去った。

岩太は「ふん、死んじまったのか」と帷子を眺めまわした。「死んじまって、まあしょうがねえが、なんでえこりゃ、変なまねをするんじゃねえか。これをどうしろってんだ。形見に呉れるとでもいうのかい」

彼は頭を掻いた。「さてよ。いま妙なことを云いやがったな。よじょうの故事にならってどうかか…そう

だ、よじょうの故事にならって恨みをはらせてやがった。よじょうたあ、わけのわからないかさまみていなこと云いやがって、これをどうしろと…おつ」岩太は眼をあげた。道

からこっちへ、いつかの見廻り組支配が下りて来た。木下主膳であった。支配は宮本家から役所へ戻る途中であった。主膳は岩太に頭を下げた。

「なにも申上げません。御心中お察し申す」主膳は「垢付きのことも聞い

てまいった。さすが二天殿、豫讓の

故事とはゆき届いたお志。どうぞこれをもって恨みをはらして下さい」

岩太は「いまは頭がいっぱいで、その故事も、なにも考えることができません」主膳はうなずいた。「故

事とは豫讓の斬衣、かの晋の豫讓と申す者が、智伯という旧主の仇を討つことができず、ついに仇の裏子の

着物を斬って恨みをはらしたという高名な出来事をさすのです」岩太は

小屋の中に飛び込んだ、帷子を放り出し、反っくり返って笑い出し、小屋

の中を笑いながら駆けまわった。早いところ、この小屋も焼き捨てよう。しばらく温泉にでも出掛ける

か。金はたっぷりだ…。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
 休館日 毎週月曜
 (月曜日が祝日の場合は次の日)
 12月29日~1月3日
 入館料 大人300円・中高生200円
 交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
 →能古(徒歩5分)→博物館
 〒819 福岡市西区能古522-2
 ☎(092) 883-2881・2887
 FAX(092) 883-2881